唐桑の漁村にて

高校を卒業してから欧米に留学し、ベトナム、スリランカ等の海外被災地で国際協力の仕事に従事してきた。海外の被災地でのフィールド調査は、外部から来た研究者、もしくは復興支援を行う支援者の立場なので、紛争や津波、洪水の壮絶な被災体験を聞きながらも、無意識ではあっても常に（外国人であるという）部外者の視点でいたのかもしれない。異なる文化背景を持つ外国人の研究者が的外れな質問をしても大目に見てくれたり、気を利かせた通訳の人がうまく調整してくれたりするだろうという甘えがどこかにあったのかもしれない。

そのような私が 1 年前から日本の大学で働き始め、初めて日本の被災地で調査を行った。東日本大震災の被災地である気仙沼の唐桑半島の漁村を訪れたのは、震災後 6 年を経ていた。宮城県内だが仙台からバスを乗り継いで 4、5 時間もかかる漁村で、聞き取り調査の約束時間に遅れないように前日から村に入った。そして前もって村を歩いて雰囲気をつかみビジターセンターに行き情報を収集した。唐桑は宮城県北東の気仙沼市の東方に位置し、リアス式海岸の地形を持つ。漁業の町として栄えたが、漁業の衰退に伴い津波前から過疎化がすすんでいた。唐桑半島の漁業は、半島の東側の外海と半島の西側と大島に挟まれた内湾とでは方法が大きく異なる。外洋は地理的に外に出やすく遠洋や沿岸漁業によるマグロ漁、カツオ漁、ワカメの養殖が盛んである。内湾は入り江が多く波が比較的穏やかで、プランクトンが豊富なため、定置網による沿岸漁業や牡蠣等の養殖が盛んである。このように外洋と内湾とでは環境が大きく異なり、それぞれの地域的特性を活かした漁業がおこなわれている。

津波はこれまで幾度となく唐桑半島沿岸部の村を襲った。明治 29 年、唐桑町の神の倉（かんのくら）の集落に 30 メートル程の津波が来て田畑が被災した。その経験から集落の住民が土を盛って作った堤防の後が今も残っていた。

写真① 津波で打ち上げられた 100 数十トンの津波石

2011 年の東日本大震災では、唐桑半島の沿岸部は津波で壊滅的な被害を受け 100 人余が亡くなった。神の倉には、2011 年に沖合 50 メートルから流されて打ち上げられた百数十トンの「津波石」があり、津波の威力の大きさを物語っている（写真①）。

さらに半島の最南端まで歩くと、御崎（おさき）神社がある（写真②）。気仙沼港から漁に出る船は全て沖合いから御崎神社に一礼して、大漁と航海の安全を祈り出発する。年に一度の御崎神社の夏季例祭では、御崎神社の神輿が港から船に乗り沖へ出て神酒と塩をあげて大漁を祈る（写真③）。唐桑半島の沿岸部は複雑に入り込んだリアス式の海岸地形のもとに、地域ごとに多様な暮らし、文化や伝統が根付いている。

写真②唐桑半島の岬にある御崎神社

津波前から伝わる集落ごとの郷土芸能は、地域の文化や産業、生活の中で育まれ伝承されてきた。その郷土芸能の関係者から聞き取り調査やアンケートの調査を行い、災害復興と郷土芸能の相関性について調べるのが調査の目的である。

写真③夏季例祭に御崎神社から港へ運ばれる神輿

日本でのフィールド調査は初めてだったので、前日から緊張して眠れず、調査当日の朝も食欲がなかった。災害後 6 年を経て今さら何を聞きにきたのかと思われたり、津波で被災した方を傷つけたり、怒られたらどうしようと思い、正直とても不安だった。当日は唐桑半島の 5 つの郷土芸能の関係者から、郷土芸能の由来、保存会の運営活動やメンバー、震災前後の変化等について 1 日話をうかがった。唐桑の鮪立（しびたち）という集落で数百年の歴史がある大漁唄込（だいりょううたいこみ）という郷土芸能は、当時和船が帰港する際に櫓を漕ぐ拍子に合わせて唄われ、入港の前か

ら唄い始め、留守家族にいち早く水揚げ支度を促す伝達手段の役割を果たしていたと言われている。現在は遠洋漁船が動力船となり櫂を漕ぐ機会が減り、実際に船の上で大漁唄込が唄われることはなくなってきている。集落によって歌詞や曲調も少しずつ変化してきたが、鮪立の唄込は唐桑の大漁唄込の原点として櫓櫂の拍子に合わせた、ゆったりとした昔からの曲調を守り継いできた。大漁唄込の郷土芸能は宮城県から岩手県の沿岸集落まで広がっているが、漁業の衰退や少子高齢化がすすんだ集落で、現在も活動している保存会は多くない。

唐桑半島の南端に位置する崎浜（さきはま）という集落にも 300 年以上前から伝わる大漁唄込がある。「海を愛し、海に感謝し、海に捧げる讃歌であり、豊穣の海から港入りする漁師の凱旋歌」と言われている。崎浜大漁唄込保存会のメンバーは、遠洋漁業を引退した漁師や沿岸漁業に従事したりしている 60 代から 80 代の漁師である。聞き取り調査は私の不安を一掃し、終始とてもなごやかにすすんだ。私の緊張を察したのか、女性の研究者の訪問は珍しいのか、「大学の若い女性の先生はいつでも大歓迎」と冗談を言いながら、郷土芸能や震災の話だけでなく、保存会に関わることになったきっかけや、幼少期に家で父親が大漁唄込を唄っていた話、長期間漁に出ていて久々に集落に戻ってきた時の家族の話、漁師の飲み会である直会（なおらい）の話など、初めて訪問した私に冗談を交えながらいろいろな話をしてくださった。その中でも、「郷土芸能である大漁唄込は、長い歴史を振り返ると、集落では多くの災害や、不漁、遭難などの苦難を経験するなどいろいろとつらいことがあったけど、先祖代々300 年間唄い続けてきた唄は、そのたびに唄い手を励まし喜びを与えてくれるもの」とおっしゃったことが深く心に響いた。郷土芸能と災害復興の相関性に焦点を当てて、仮説を立証しようと調査をしている私はとても視野が狭くちっぽけに思えた。日本での初めての調査は、調査結果として文章や数字には出てこない多くの貴重なことを学び終わった。

飯塚明子（いいづかあきこ）